

大声をあげたイエス

(ヨハネ二・四四〜五〇)

(さんま)「バラエティにはあまりお出になりませんね」(渡)「自分たちは、台湾の世界ですから、即興性が無いのですから、こう、臨機応変に立ちまわることができないんです。」(さんま)「かつこいいい!、いやほんと。いつてみたいわあ」渡哲也、確にかつこいい。少し照れたような話しぶり。一言一言を丁寧に、言葉を選んでは話す。そして絶妙の間。明石家さんまの甲高く、大声で、しかもテンション高めの芸人トークとは好対照である。

閑話休題。聖書は書物であるから、今日我々がイエスの声について知ることができることはごく限られている。しかしイエスがかの大物芸人のようなテンション高めのしゃべり方をしたとは考えづらい。やはり人を魅了するような静かな声であったのだと考えたい。しかし今朝の個所で福音書記者はイエスが大声を上げられたと書いている。何のためか。もちろんそのメッセージをよく聞かせるためである。以下二つのポイントからイエスの迫真のメッセージに迫りたい。

一、イエスを信じる＝神を信じる

大声をあげてイエスが語った第一のこと、それはイエスを信じる者は、彼を遣わした方、すなわち神を信じるということであった。イエスと彼を遣わした神との密接な関係は共観福音書においても語られているが(マタイ一〇・四〇、マルコ九・三七)、この福音書はより鮮明なタッチがある。そしてこの福音書における御子の特異なまでの父に対する従属は実にそれによって御子が行うすべてのことが父のみどころにかなうものであることを保証する(D・A・カーソン)。イエスこそは父なる神から発せられる光であり、それを信じる者はその瞬間から神の光を見ることが可能なのである。

だからイエスご自身が「私を信じなさい」という時、その意味はあくまでも「わたしを父のもとから遣わされた神そのものとして信じなさい」であることを読者は肝に銘じておくべきだ。畢竟イエスを信じることは単にイエスを人生のモデルにしたたり、参考にしたることではないし、ましてや願掛けのお守りと同様にすべきでもない。むしろ地上を歩かれた完全な人間であると同時に父のみどころを完全にあらわされた受肉された、生けることばとして彼を信じ、それに保留なく従うことを指すのである。

二、イエスと救いとそのさばき

四七節はそれだけを取り上げると都合よく聞こえる箇所である。何せイエスは自分の語る言葉に聞き従わなくても、その人をさばかないというのだから。しかしこの言葉には続きがある。四八節を見るとイエスは自らが語ったことばが終わりの日にその人を裁くといっている。ではこの両節の関係はどう理解されるべきだろうか。まず四七節であるが、これは主にイエスがこの地上を歩かれたときの人々の拒絶について言っていると考えらるべきだろう。彼の生涯において人々から拒絶されることは十字架にかかるための必要条件であった。だからイエスはそうした行動をとった人々をその時点でさばくことをせず、むしろ世の救いのため自らを十字架に向かわせることをよしとされたのである。しかしイエスがその生涯で語ったすべてのことばは有効であり、それを拒み続けたものは終末において裁かれてしまうとイエスは語られたのだ。つまりこの箇所の理解は共観福音書における「たとい、人の子をそしめることばを使う者があつても赦されま

す。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。」の意図とよく似ているということになる。翻つて私たちは聖霊降臨後の時を生きており、聖書により、聖霊の助けによつて父のみどころそのものである御子が時にやさしく、時には大声で語ることを常に聞いている。しかしなお大切なことは、それを信じ従っていくことなのである。

* * *

白球を追う彼の青春はあつけなく終わった。打球を目に受けてしまったのだ。頭痛や肩こり、さらには発熱に悩まされ退部を余儀なくされた。思うようにいかない自分が悔しかった。友の活躍が腹立たしかった。いつしか彼はひきこもりになった。自傷行為や親への八つ当たり。彼はもがいた。そんな時知人の勧めで彼は渡米、一転留学生となった。しかしやはり道は開けない。心の闇を抱えたまま彼は転校を繰り返し、心の病を抱えたままクリスチャンカレッジに流れ着いた。ほどなくジェフという宣教師からイエスについて聞き、勧められるままにヨハネ福音書を読んだ。そうして「私を信じる者は死んでも生きる」「信じる者は闇を歩くことなくいのちの光を持つ」といったみ言葉に出会い、さらにジェフの招きによつてイエスのことばに聞き従った。今、クリスチャンになった彼、米田浩司さんはギターを片手に旅をしながら日本各地の教会を回っている。ひきこもる青年たちに希望の光を届けるために。アーメン。